気仙沼－南三陸－鮎川－秋保

おかみさん新春トーク⑧

―インバウンド（訪日外国人旅行）の取り組みについてお聞かせください。

阿部　インバウンドを増やすためには、震災による風評被害の解消、交通アクセスの復旧などに積極的に取り組む必要があります。

自分たちでできることを―と、課題である人材確保にも取り組んでいます。インターネットを使って募集した結果、6カ国語を話せるという社員、元アナウンサーの社員を採用することができました。また、海外から嫁いで来たスタッフも力になっています。

被災地に関わっていこうという人は頼りになりますし、前向きです。こうした人たちがインバウンド増に結びつく知恵を持っているのではないでしょうか。

昨年、台湾の大学生がインターンシップで当ホテルに来ました。1カ月、2カ月滞在してもらうと、沿岸部の人たちの日常生活を見ることができ、何を食べているのか、どんなことを考えているのかを分かってもらえます。

休みの日には岩手県の平泉、松島、登米の明治村などに連れて行きます。必ず写真を撮るので、台湾に戻ったら魅力的な場所をPRしてくれます。

きれいなパンフレットを作って配るだけでなく、われわれのレベルでもできる取り組みを積み重ねていけば、インバウンド増につながっていくと思います。

―遠藤さんはインバウンドについてどうお考えでしょうか。

遠藤　現在、牡鹿半島の道路の改良工事が行われています。2年後には終了するので、かなり行き来しやすくなると思います。

今年4月に当ホテルがリニューアルオープンします。現在はスタッフ不足ですが、オープンまでは中国からの実習生を採用する予定がありますので、インバウンドについてはこれから本格的に考えていきます。

―鈴木さんはどうでしょうか。

鈴木　今年から大谷海岸の防潮堤の工事が始まります。お客さまをお迎えするには環境が整っていることも大切な事です。インバウンドはそれからですね。

―秋保温泉の取り組みをお聞かせください。

高橋　数年後のインバウンド増より50年後、100年後にどのような姿であるべきなのかを模索しています。なかなか「あきう」と読んでもらえないので、京都や熱海、伊豆のようにすぐに分かる観光地を目指します。

5年前から「世界リゾート秋保」を掲げてまちづくりに取り組み始めました。手つかずの自然、温泉の発信方法を試行錯誤しています。

秋保は山の観光地です。スイス、北欧のような観光地にしようと、冬に咲く花を各ホテルの玄関や民家の軒先に置いたり、ヒマワリを植えたりしています。

タイと台湾にはプロモーションに行っています。

秋保温泉はこれまで、奥座敷という敷居の高い温泉地でしたが、それはそれで若い人たちに魅力を知っていただきたいですね。歩いて楽しむ仕組み作りにも取り組んでいます。

少しずつですが、若い人たちが秋保に家を建てて、パン屋、ソーセージ屋、ピザ屋などを開業しています。ワインを製造している秋保ワイナリー、旅館組合と連携した活動を展開しています。**続く**

◆出席者◆

鈴木　緑さん（はまなす海洋館）
阿部　憲子さん（南三陸ホテル観洋）
遠藤　和子さん（ホテルニューさか井）
高橋　知子さん（篝火（かがりび）の湯緑水亭）

三陸新報社編集局次長　玉谷誠一

平成30年1月12日（金）【三陸新報】